

蘇軾詩注解補（五）

西岡 淳
山本 和義
南山 読蘇 会

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括

弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品

表』による通し番号。

田国博「石炭の詩を示さる。「劍を鑄て佞臣を斬らん」の

句有り、次韻して之に答う（〇九三六）

郡中の同僚の雨を賀するに答う（〇九三七）

徐州を罷めて南京に往かんとし、馬上に筆を走らせて子由

に寄す 五首 その二・その三・その五（〇九四〇・〇九

四一・〇九四三）

曹九章が贈らるるに次韻す（一二〇五）

泗州の孫景山が西軒に書す（〇九四六）

〇九三六（施一六一—二四）

田国博見示石炭詩有鑄劍斬佞臣之句次韻答之

田国博「石炭の詩を示さる。「劍を鑄て佞臣を

斬らん」の句有り、次韻して之に答う

1 楚山鐵炭皆奇物

楚山の鉄炭 皆な奇物

2 知君欲斫姦邪窟

知んぬ 君が姦邪の窟を斫らん

と欲することを

3 屬鏤無眼不識人

屬鏤 眼無くして人を識らず

4 楚國何曾斬無極

楚國 何ぞ曾て無極を斬らん

5 玉川狂直古遺民

玉川が狂直なるは古の遺民

6 救月裁詩語最眞

月を救い詩を裁して 語 最も

7 千里妖墓一寸鐵

千里の妖墓 一寸の鉄
真なり

8 地上空愁蟻蝨臣

地上 空しく愁う 蟻蝨の臣

元豊二年（一〇七九）、四十四歳の作。時に知徐州として徐州に在った。

○田国博 このとき徐州通判であったと思われる田姓の人物。国博は国子監博士のこと。『蘇軾詩注解補（二）』に収める作品番号〇九一〇の詩の注を参照。田国博の元の詩は、詩題に引く一句以外は伝わらない。○石炭詩 これより先、蘇軾は徐州において「石炭 并びに引」と題する詩を作っている（『蘇軾詩注解補（二）』に収める作品番号〇九一七の詩）。○斬佞臣 『漢書』朱雲伝に、「臣 願わくは、尚方^{ほう}の軛馬劍^{ぎんけん}を賜わりて、佞臣一人を断ちて以て其の余を厲^{はげ}まさん」とある。

1○楚山 徐州は、戦国時代には楚に属した。秦では泗水郡が置かれたが、その後^{のち}に項羽は西楚の霸王と号し、その地に都を置いた（『太平寰宇記』卷一五）。そうした歴史的背景から、徐州の山を楚山と称する。「石炭」詩（詩題の

注を参照）の引には、徐州で得られた石炭と鉄によって刀剣を鑄たことを、「州の西南の白土鎮の北に獲たり、鉄を冶^やして兵を作るに、犀利なること常に勝ると云う」と記す。

○奇物 世にめずらしいもの。『史記』呂不韋伝に、「五百金を以て奇物・玩好を買う」とある。2○姦邪 よこしまなこと。また、悪人。『管子』形勢解に、「故に姦邪日に多^ひくして、人主愈いよ蔽^{おほ}わるとある。○窟 人や物の集まるところ。「将^{まさ}に湖州に之かんとして、戯れに華老^{しんろう}に贈る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊四〇五頁）を参照。34○属鏤・楚国二句 属鏤は、名劍の名。春秋時代、楚の伍子胥の父である伍奢は、楚の平王の太子建に太傅として仕えたが、少傅の費無極（『春秋左氏伝』昭公二十年の表記。『史記』では費無忌）に讒言され、長子の尚とともに殺された。ひとり楚を逃れた伍子胥は、後に呉王闔廬に仕えて楚を討つが、その後になつて越王勾踐に買収された太宰の伯嚭の讒言を被り、闔廬から名劍属鏤を賜つて自刎して死んだ（『史記』伍子胥伝）。5○玉川 唐の盧仝の号（玉川子）。○狂直 周圜をはばからず^に正しさを通そうとすること。『漢書』朱雲伝に、「此の臣は素より狂直を世に著す」とあ

る。なお、このくだりは詩題の注に引いた一節とともに、「折檻」の故事の一部をなす。6〇救月一句 盧全が「月蝕詩」(『玉川子詩集』卷一)を作り、月蝕を、月(天子の喩え)が蝦蟇の精に呑まれることに見立てて、当時の逆臣らを批判したこと。『唐才子伝』卷五に、「元和の間、月蝕す。全詩を賦し、意に当時の逆党を切す。(韓)愈は極めて工と称するも、余人は稍く之を恨む」とある。裁詩は、詩を作る。杜甫「江亭」詩に、「故林 帰ること未だ得ず、悶を排し強いて詩を裁す」とある。78〇千里・地上二句 盧全「月蝕詩」に、「古老の説くを伝聞す、月を蝕する蝦蟇の精、徑四千里 汝が腹に入ると、汝が此の痴骸 阿誰か生ぜし、……地上の蟻蝨の臣全 帝天皇に告懇す、臣が心に鉄の一寸なる有り、妖蟇が痴腸を剝る可し、上天 臣が為に梯磴を立てずんば、臣が血肉の身、上天に飛んで天光を揚ぐるに由無し」(梯は、はしご。磴は、いしばし)とある。差し渡し千里の蝦蟇の精に対して、盧全はシラミのように卑小な存在ではあるが、身には寸鉄を帯びており、天帝に対して、月までの道をつけて蝦蟇を討たせてほしいと願うこの一節をふまえる。

ここ楚山は鉄と石炭が良質なので、あなたが「剣を鍛えて姦邪の巢窟を一掃せん」とうたうのも頷ける。いにしえの属鏝の剣には眼が無かったので、相手を見極めることもできず(に忠臣の伍子胥の命を奪い)、楚の国ではついで(奸臣の)費無極が斬られることがなかった。

盧玉川(全)は剛直で古人の風があり、月を救おうと作った詩のことばには真の情があらわれている。「大いなるガマに小さな鉄の武器、せん方なく地上で愁うシラミの臣」というふうには。

〇九三七(施二六一二五)

答郡中同僚賀雨

郡中の同僚の雨を賀するに答う

- 1 水旱行十年 水旱 行くゆく十年
- 2 飢疫遍九土 飢疫 九土に遍し
- 3 奇窮所向惡 奇窮 向かう所惡し
- 4 歲歲祈晴雨 歲歲 晴雨を祈る
- 5 雖非爲己求 雖非 爲己に求むるに非ずと雖も

- 6 重請終愧古 請うを重んずるは終に古より愧ず
 7 鬼神亦知我 鬼神も亦た我を知らん
 8 老病入腰膂 老病 腰膂に入る
 9 何曾拜向人 何ぞ曾て拜して人に向かわん
 10 此意難不許 此の意 許さざるに難し
 11 重雲妻已合 重雲 妻として已に合し
 12 微潤先流礎 微潤 先ず礎に流る
 13 蕭蕭止還作 蕭蕭として止んで還た作り
 14 坐聽及三鼓 坐して聴いて三鼓に及ぶ
 15 天明將吏集 天明 將に 吏 集まり
 16 泥土滿靴屨 泥土 靴屨に満つ
 17 登城望麩麥 城に登りて 麩麥を望めば
 18 綠浪風掀舞 綠浪 風に掀舞す
 19 愧我賢友生 愧ず 我が賢友生
 20 雄篇鬪新語 雄篇 新語を鬪わしむ
 21 君看大熟歲 君看よ 大熟の歲
 22 風雨占十五 風雨 十に五を占む
 23 天地本無功 天地 本と功無し
 24 祈禳何足數 祈禳 何ぞ數うるに足らん

- 25 渡河不入境 河を渡り境に入らざるも
 26 未若無蝗虎 未だ蝗虎無きに若かず
 27 而況刑白鵝 而るを況んや白鵝を刑するをや
 28 下策君勿取 下策 君取ること勿かれ
 元豐二年（一〇七九）、四十四歳の作。
 1〇水旱 大水と日照り。『莊子』秋水篇に、「春秋にも變
 ぜず、水旱をも知らず」とある。2〇九土 九州に同じ。
 太古、中国が九つの州に分けられたとされることから、中
 国全土のこと。左思「蜀都の賦」（『文選』卷四）に、「九
 土の星分には、万国錯わり峙つ」とある。3〇奇窮 不幸
 せなこと。不運。奇は、数奇（運命がくいちがう）の意。
 蘇軾以前に用例を見ない。4〇歳歳一句 このとき以前、
 蘇軾が晴または雨を祈った主な事例を以下に挙げる。熙寧
 六年（一〇七三）七月立秋、杭州の上天竺寺で祈雨（『蘇
 軾年譜』上冊二五六頁）、熙寧八年（一〇七五）四月初、
 密州の常山で祈雨（同三一二頁）。熙寧九年（一〇七六）
 五月、同じく密州の常山で祈雨（同三三三頁）。熙寧十年（一
 〇七七）六月、徐州の漢高帝廟にて祈晴（同三六四頁。こ

年の八月には黄河の水が溢れて徐州に及んだ。元豊元年（一〇七八）三月、徐州の石潭にて祈雨（同三九二頁）。同年十二月には、徐州の霧猪泉にて雪を祈っている（同四一三頁）。これ以外に蝗害を除くべく祈りをささげた例もあり、この句に言うところは略ぼ事実に近い。6〇重請『春秋穀梁伝』定公元年に、「雩」（雨乞い）に関連して以下の記述がある。「雩なる者は、早の為に求むる者なり。求とは、請なり。古の人は、請を重んず。何ぞ請を重んずるか。人の人為る所以は、讓なり。道を請いて讓を去るなり。則ち是れ其の人為る所以を舍つるなり。是を以て之を重んず。……夫れ請なる者は、詒託して往く可きに非ざるなり。必ず之を親しくする者なり。是を以て之を重んず」。

8〇腰膂 腰と背骨。10〇難 瑞溪周鳳は、「難ノ字ハ、許サザルヲ以テ憚ルト為スナリ」（『四河入海』卷七の二）という。11〇妻 妻妻は、雲のながれるさま。『詩経』小雅（甫田之什）「大田」に、「澮として妻妻たる有り、雨を興すこと祁祁たり」とあり、毛伝に、「妻妻は、雲の行く貌」とある。12〇微潤一句 礎は、建物の柱のいしずえ。『淮南子』説林訓に、「山雲蒸せば、柱礎潤う」とある。13〇

蕭蕭 雨がものさびしくふる音の形容。「九月中に曾て二小詩を南溪の竹上に題す……」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五六一頁）を参照。14〇三鼓 三更のこと。今の午前零時の前後二時間ほど（季節により長さは異なる）。17〇麩麥 大麦。18〇緑浪一句 風が麦畑を吹きわたり、麦をなびかせるさまをうたう。柳宗元「黃鸝を聞く」詩（『柳河東集』卷四三）に、「目 千里を極むれば山河無く、麦芒 天に際わつて青波を揺らす」とある。21〇大熟 穀物がよく実ること。『尚書』金縢に、「歳則ち大いに熟る」とある。22〇風雨一句 『論衡』是応篇に、「儒者は太平の瑞応を論じ、……風 条を鳴らさず、雨 塊を破らず、五日に一たび風き、十日に一たび雨を言う」とある。24〇祈禳 福を祈り禍をはらう。『漢書』孔光伝に、「俗の祈禳の小數、終に天に應じて異を塞ぎ、禍を鎮して福を興すに益無きは、較然として甚だ明らかにして、疑惑す可きこと無し」（小數は、つまりらぬわざ）とある。25 26〇渡河・未若二句 後漢の宋均が九江太守となつたとき、虎が民を害することが多いため、これを捕獲するための罾が仕掛けられていた。宋均は、「野に獸が在るのは自然なことであつて、

民に患いを為すのはむしろ残酷な役人である。苦勞して虎を捕らえるのは、憂え憐れむ道に反している。貪欲な役人を退けて善良な役人を用いるよう心がけ、虎のための罾や捕獲のための強制労働を廃するべきである」といった。その後、虎は東のかた長江を渡って去り、イナゴは九江の境まで来ると東西に散じて去ったという（『後漢書』宋均伝）。但し、この故事で虎が渡ったのは長江で、黄河（渡河）ではない。『後漢書』劉昆伝には、劉昆が弘農太守となったとき、馱道に虎の害が多く、人の行き来を妨げたが、「昆政を為すこと三年、仁化大に行われ、虎は皆な子を負いて河を度る」との記述がみえる。27〇刑白鵝 宋代には、ガチョウの頸を切つて血を抜き、これを供えて雨を祈る風習があった。「舒堯文が雪を霧猪泉に祈るに次韻す」詩（『蘇軾詩注解補（二）』）の注を参照。28〇下策 最低の方策。漢の賈讓が黄河の治水について献策したとき、上・中・下の三策を挙げたことに基づく（『漢書』溝洫志）。「郡の東北の荆山の下、溝畎を以て水を積む可しと言うもの有り……」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊三八〇頁）を参照。

水害や旱魃に十年近く苦しめられて、飢えと疫病が天下に蔓延している。人並み外れて不運な私であるから、行く先々でよくないことばかり起こって、毎年のように長雨には晴天を、旱魃には降雨を祈ってきた。自分のためにするのではないとはいえ、人事を尽くさずして神頼みを第一にするというのは、昔から恥ずべきことだ。腰を痛めた老いぼれが、（その痛さゆえに）人を拝したこともないのに（今ここに拝するとあつては）、鬼神もその願いを拒みにくかつたとみえる。

幾重にもかさなつた雲がやって来て空をおおつたかと思ふと、柱の礎がかすかに湿りはじめた。止んだかと思えばまたしとしと降りだして、夜更けまでその雨音にじつと聞き入つた。夜が明けると履き物を泥だらけにして役人たちが集まってくる。城壁に登つて麦畑を眺めやれば、緑の波が風になびいて舞い上がるようだ。

わがすぐれた友人たちが、新奇な語を競つて雨を賀する立派な詩を作ってくれたことに対して、私は恥ずかしく思う。ご存知のように、豊作の年には十日にいちど雨が降り、五日にいちど風が吹く。もともと天地自然は何かのために

働くものではないのであって、人が祈禱をすることで、人にも祈禱をすることで、人に足らぬことなのだ。(仁政が行われると)虎が川を渡って去り、イナゴは国境に入ってこない、などとはいうが、そんなものは最初からいないのに越したことはない。まして罪もない白のガチヨウを生け贄にするなどという最低の策をとってはならないのだ。

○九四〇・〇九四一・〇九四三(施一六一―二七・二八・三〇)

罷徐州往南京馬上走筆寄子由五首

徐州を罷めて南京に往かんとし、馬上に筆を走らせて子由に寄す 五首

○九四〇(施一六一―二七)

その二

- 1 父老何自來 父老 何れ自りか来たる
- 2 花枝裊長紅 花枝 長紅に裊む
- 3 洗盞拜馬前 盞を洗いて馬前に拜し

- 4 請壽使君公 壽を使君公に請う
- 5 前年無使君 前年 使君無くんば
- 6 魚鼈化兒童 魚鼈 兒童を化せん
- 7 舉鞭謝父老 鞭を挙げて父老に謝す
- 8 正坐使君窮 正に使君の窮に坐る
- 9 窮人命分惡 窮人 命分 惡し
- 10 所向招災凶 向かう所 災凶を招く
- 11 水來非吾過 水の來たるも吾が過に非ず
- 12 去亦非吾功 去るも亦た吾が功に非ず

元豐二年(一〇七九)、四十四歳の作。時に徐州(江蘇省)知事より湖州(浙江省)に転任を命ぜられ、赴任途中に蘇轍のいる南京(河南省商丘)に立ち寄った。詩は徐州を発つて南京に向かう途上の作。五首の連作で、その一・その四については、『蘇東坡詩選』に訳注を収める。

1〇父老一句 後漢の劉寵は会稽太守となり、その地の官吏たちが質朴な山地の民を厳しく取り締まっていた従来 of 弊風を改めて、郡中はよく治まった。後に劉寵が徴せられて将作大匠(土木を管掌する官)に転ずる際、山中から数

人の老叟が現れ、それぞれ百錢を差し出して劉寵を送ろうとした。劉寵が「父老 何ぞ自ら苦しむ(どうしてこんなご苦労なことを)」と言ったところ、老叟たちは、「以前は官吏が昼夜を問わずに徴発にやって来たため、夜通し犬が吠え続け、民心も平穩を得ませんでした。貴方が太守となられてからは、官吏の姿を見ることもなく、犬も夜吠えることがなくなりました。老いてようやく聖明の治に浴したというのですが、いま我々を置いて去られるというので、お送りに参ったのです」と礼を述べた(『後漢書』循吏列伝の劉寵の伝)。2○花枝一句 王注(趙堯卿)は、「方俗に、官の任を罷むるを送るとき、花枝を以て綵を挂く、之を長紅と謂う」という。この詩が作られたのは三月であり、ここでは造花(綵)などを用いるのではなく、花の咲いた枝そのものを饒として贈るのである。裊は、花が枝にまとわりつく感じをあらわす。4○請寿一句 請寿は、健康を祝福すること。使君公は、知徐州の任に在った蘇軾自身のこと。知事さま。白居易「初めて江州に到る」詩(『白居易集箋校』卷一五)に、「遙かに見る 朱輪 来たりて 郭を出で、相迎えて労働す 使君公に」とある。56○

前年・魚鼈二句 この二年前の熙寧十年(一〇七七)の秋、黄河の堤防が決壊し、溢れ出た水が徐州の城下まで到り、城壁が崩れる危険があった。二句はそのことをいう。「河復」詩(『蘇東坡詩集』第四冊三六五頁)を参照。6句は、押韻の關係で兒童と魚鼈とが倒置されたもの。「春秋左氏伝」昭公元年に、「禹微かりせば、吾れ其れ魚たらんか」とある。7○拳鞭 3句「馬前」を承けて、人々を振り切つて旅立とうと馬に鞭を入れようとすること。これから赴く南京の方を指す意を込めるかもしれない。この語は、『晉書』山簡伝にみえる。「西湖にて戯れに作る」詩(『蘇軾詩注解』十六)「所収」の注を参照。9○命分 めぐりあわせ。命運。白居易「白雲期」詩(『白居易集箋校』卷七)に、「年長じて命分を識り、心慵くして營為少なし」とある。10○災凶 わざわい。『後漢書』盧植伝に、「案するに今年の変は、皆な陽失われて陰侵す、災凶を消し禦ぐには、宜しく其の道有るべし」とある。

どこからか主だった人々が現れ、花の咲きほこる枝を私へのはなむけとする。そして杯を洗つて馬前に一礼し、知

事どのの健康を祝していうには、「知事さまがおいでにならなければ、子供らは魚になつていたことでしよう」。

私は鞭を高く挙げて人々に別れを告げる。「洪水はこの知事の不幸もたらしたもので、不幸の者は運勢に恵まれぬゆえ、行く先々で災厄を招いてしまうのだ。だから、水が増したのが私という個人の過失ではないとしたら、水が引いたのも私個人の功績ではないのだよ」。

○九四一（施一六一—二八）

その三

- 1 古汴従西來 古汴 西従り来て
- 2 迎我向南京 我の南京に向かうを迎う
- 3 東流入淮泗 東流 淮・泗に入りて
- 4 送我東南行 我の東南に行くを送る
- 5 暫別還復見 暫く別れて還つて復た見る
- 6 依然有餘情 依然として余情有り
- 7 春雨漲微波 春雨 微波を漲ぎらせ
- 8 一夜到彭城 一夜 彭城に到る

9 過我黃樓下 我が黄樓の下を過ぎて

10 朱欄照飛甍 朱欄 飛甍を照らす

11 可憐洪上石 憐れむ可し 洪上の石

12 誰聽月中聲 誰か月中の声を聴かん

1 2 ○古汴・迎我二句 古汴は、古い汴河のこと。西から流れてきて徐州を通り、泗水に注いだ。泗水は更に東南に流れて淮水に注ぐ。『太平寰宇記』（卷一五）徐州蕭県の条に、「古汴河は、県の南十歩に在り」とある。蘇軾は徐州を發つて蘇轍のいる南京応天府（商丘）に向かったのだが、その途上で西から流れてくる古汴河を過ぎたことをかくいう。3 4 ○東流・送我二句 前の二句を承け、今度は南京から任地の湖州に向かう蘇軾を送るかのように、古汴河は東南に流れて泗水に、泗水は淮水に注ぐことをいう。6 ○依然一句 依然は、なごりおしくはなれにくいさま。依然と同じ。江淹「別れの賦」（『文選』卷一六）に、「惟れ世間の別れを重んずる、主人を謝すること依然たり」とある。余情は、尽きせぬ情。名残の風情。唐・周賀「早秋、郭涯が書堂に過る」詩（『全唐詩』卷五〇三）に、「暑消えて岡

舎清し、閑語 余情有り」とある。陸游「遲暮」詩（『劔南詩稿』卷一五）に、「青燈 語を解せざるも、依依として余情有り」、また、「早行」詩（同卷三〇）に、「雲間に寸塔出づ、我を迎えて余情有り」とある例なども参考となる。8 ○彭城 徐州の異称。「梁先・舒煥と舟を泛べて、臨・釀の二字を得たり 二首」その一の注（『蘇東坡詩集』第四冊二五六頁）を参照。9 ○黄楼 徐州のたかどのの名。熙寧十年（一〇七七）の秋に起こった黄河の氾濫に際して、蘇軾はその大水が徐州城内を侵すのを防いだ。その功により朝廷から下賜された錢穀を用い、翌年（元豊元年）に徐州の東門上に楼閣を築いて黄楼と名付けた。「九日 黄楼の作」（『橄欖』第十六号所収『蘇東坡詩集補（二）』）を参照。10 ○朱欄 朱塗りの欄干。○飛甍 甍は、いらか。むながわら。屋根の棟をおおうかわら。飛は、高くそびえる意。謝朓「晩に三山に登りて京邑を還望す」詩（『文選』卷二七）に、「白日 飛甍を麗らし、参差として皆な見る可し」とある。11 12 ○可憐・誰聴二句 洪上石は、百歩洪のほとりの石。百歩洪は、徐州の東南にある急流で、洪は早瀬の意。「李邦直が「沂山に雨を祈って応有り」に和す」

詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二三二頁）を参照。二句について一韓智翹は、「此ノ水ガ、徐州ノ百歩洪ナンドヲ流（レ）テ行（ク）可キガ、我ハ、ハヤ徐ノ守ヲ退シテ居ラザル程ニ、誰カ、其ノ月夜ノ水声ノ、洪上ノ石ニ激スルヲバ聴（ク）可キゾト云（フ）ゾ」（『四河入海』卷一六の二）と記す。

古汴河の水は西の方から流れきて、南京応天府へと向かう私を出迎える。そして東へと流れ、泗水、また淮水に注ぐべく、旅ゆく私を見送って東南に流れてゆく。しばらく離れては再び姿をあらわすそのさまには、名残を惜しむ豊かな感情があるかのようだ

さざ波を立てるその流れが春の雨に水かさを増して、一夜のうちに彭城の街まで流れゆけば、私の築いた黄楼のものと通り過ぎて、その朱塗りのあざやかな欄干や、甍を戴いてそびえる楼の姿を映すことだろう。残念なことに、その流れが百歩洪のほとりの石にぶつかって、月の光の下で盛んに音をたてても、それを聴く者はもういない。

○九四三（施一六一三〇）

その五

- 1 ト田向何許
田をトして何許にか向かわん
石佛山南路
石仏山南路
下有爾家川
下に爾が家川有り
千畦種杭稌
千畦 稌稌を種う
山泉宅龍蟹
山泉 龍蟹宅まい
平地走膏乳
平地 膏乳走る
異時畝一金
異時 畝 一金
8 近欲爲逃戸
近ごろ逃戸を爲さんと欲す
9 逝將解簪紱
逝きて將に簪紱を解き
10 賣劍買牛具
劍を売りて牛具を買わんとす
11 故山豈不懷
故山 豈に懷わざらんや
12 廢宅生蒿槽
廢宅 蒿槽を生ず
13 便恐桐鄉人
便ち恐る 桐郷の人
14 長祠仲卿墓
長く仲卿が墓を祠らんことを

1〇ト田 隱棲する田園の地を占って定めること。この連

作の第四首は、「帰耕 何れの時にか決せん、田舎 我は已にトせり」と結ばれる。これを承けたもの。2〇石仏王注（李厚）をはじめとする旧注は、蘇軾の故郷である眉州の山とするが、この詩の内容からすれば徐州にある山と解すべきであろう（『蘇軾詩集校注』の指摘）。『太平寰宇記』（卷一五）徐州彭城県の「石仏井」の条に、「石仏井は、県の南四里の石仏山の頂にあり」とある。また、『大明一統志』（卷一五）徐州の「山川」の項にも、「石仏山は、州城の南二里に在り」とある。34〇下有・千畦二句 家川の語は他に用例を見ないが、ふるさと（の山）を家山というがごとく、徐州を通って東南に流れる泗水（川）を意識して、隱棲の地をかく呼んだものか。蘇轍がこの連作に唱和した、「子瞻 徐自り湖に移り、將に宋都に過らんとして、途中に寄せらるるに和す 五首」その四（『欒城集』卷九）に、「爾が家田を買わんと欲す、歸りて三頃の稲を種えん、因りて山前の宅を営み、遂に泗浜の老と作らん」とあるのは、これに類する発想と思える。畦は、耕地の面積の単位で、五十畝の広さ。稌（稌は本字）は、ウルチ米。稌は、モチ米。5〇龍蟹 蟹は、龍の類。蛇に似て大きく、龍のよう

な角があり、鬣なみけは紅く、腰以下の鱗はすべて逆立つとい
う（『本草綱目』巻四三三）。王維「秘書晁監の日本国に還る
を送る」詩（『王右丞集』巻一一）の序に、「黃雀の風は地
を動ゆがし、黑蜜の気は雲を成す」とある。6○膏乳 膏は、
肉のあぶらで、乳とともに栄養に富む。その土地が水に豊
かで、農作物を育む力を備えていることをいう。「章伝道
が「雨を喜ぶ」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊
五〇八頁）を参照。7○畝一金 土地一畝あたりに一金（一
斤の黄金）の値がつくほど肥沃であること。『漢書』東方
朔伝に、「豊・鎬ほうこうの間をば号して土膏と為す、其の賈畝一
金なり」とある。8○逃戸 年貢が納められないなど、生
活に窮して逃亡した農家。「除夜 大いに雪ふりて、濰州いしゅう
に留まる……」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊一六七頁）
を参照。9○逝將 逝は、世間を立ち去ること。「さつさ
と辞去して」というニュアンス。「陳海州が「乗槎亭」に
次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊四〇八頁）を参照。
○簪紒 冠をとめるこうがいと、官印のひも。官吏の身分
を指す。10○売劍一句 漢の龔遂こうすいが渤海太守となつたとき、
農民たちに農桑を勧め、刀劍を帯びている者たちには、劍

を売って牛を、刀を売って犢こぶしを買わせた（『漢書』龔遂伝）。
「山村五絶」その二の注（『蘇東坡詩集』第二冊五〇七頁）
を参照。ここでは、蘇軾自らが農民となろうとすることを
いう。12○蒿穡 蒿は、ヨモギ。穡は、自生のイネ。いず
れも荒地地に生ずる。13 14○便恐・長祠二句 漢の朱邑しゆい（あ
ざな仲卿）は、若いころ舒県じよけんの桐郷とうきやう（安徽省）の郷吏となつ
たが、苛酷なところがなく、恩情を以て人々を扱つたので、
吏民に敬愛された。後に北海郡の太守から大司農に進んだ
が、病んで亡くなるときに子に対して、「我は故桐郷の吏
為り、其の民は我を愛す、必ずや我を桐郷に葬れ。後世の
子孫 我を奉嘗ほうじやうすとも、桐郷が民に如かじ」と言つたので、
子はそのことは通りに朱邑を桐郷の西郊に葬つた。果たし
て桐郷の民は朱邑のために塚を起し祠堂を立てて、なが
らく歳ごとに祀つたという（『漢書』朱邑伝）。

帰耕の地をどこに決めたのかと問われれば、それは石仏
山の南に通じるみち（を行つたところ）。山の麓かどには君の
家があり川が流れていて、ひろびろとした田にはウルチ米
やモチ米を植えるのがいい。山奥の泉には蛟龍が住まい

(たつぷりと雨を降らせてくれて)、大地は乳と膏が流れるほどの肥沃さ。(そもそも)昔は土地一畝に黄金一斤の値がついたのに、近ごろでは農民たちが(土地を棄てて)逃亡しかねないほどだ。

さつさと衣冠を解いて役人暮らしに別れを告げて(農民となるべく)、刀剣を売り払って牛と農具を買うことしよう。わが故郷を心に思わないわけではないけれど、人も住まず荒れはてた家には雑草が茂つてもいよう。そうすると(もしも帰郷せずにこのまま徐州に老いるならば)あの桐郷の民が、(その地に葬られた)朱仲卿(邑)をいつまでも祭り続けたようになりはしまいか。

一一〇五(施一六一—三二)

次韻曹九章見贈

曹九章が贈らるるに次韻す

1 遽瑗知非我所師

遽瑗が非を知るは我が師とする所

2 流年已似手中著

流年已に手中の著に似たり

3 正平獨肯從文學

正平 独り肯て文學に従う

4 中散何曾斬孝尼

中散 何ぞ曾て孝尼に斬しまん

5 賣劍買牛真欲老

劍を売り牛を買いて真に老いと欲す

6 得錢沽酒更無疑

錢を得て酒を沽いて更に疑うこと無し

7 雞豚異日爲同社

雞豚 異日 同社を爲さん

8 應有千篇唱和詩

應に千篇唱和の詩有るべし

施注に従えば前の詩と同時期の作だが、馮応榴、王文誥は、ともに元豊七年(一一〇八四)にかける。

○曹九章 字は演甫(演父)。その子の曹煥は蘇轍の娘婿。

「神清洞の事を記す」(『蘇軾文集』卷七二)、および蘇轍「曹演父朝儀を祭る文」(『欒城集』卷二六)を参照。蘇軾が黃州に流された際、「曹 既に和せらる、復た次韻す」(『合注』卷二一)などの詩のやり取りがある。

1○遽瑗 春秋時代の衛の賢大夫で、字は伯玉。『淮南子』原道訓に、「故に遽伯玉は年五十にして四十九年の非有り。何となれば、先んずる者は知を爲し難く、而して後るる者

は攻を為し易ければなり」(攻は功の意)とある。「李杞寺丞 前篇に和せらる。復た元韻を用う」詩の注(『蘇東坡詩集』第二冊二〇六頁)を参照。2〇手中著 著は、めぐはぎ。マメ科の多年生草本。古くはその莖を占いに用いたが、後には竹の棒(筮竹)が使われるようになった。『周易』繫辭上に、「大衍の数は五十にして、其の用は四十有九なり。分ちて二と為し、以て両に象る」(五十本の著から一本を除き、四十九本を両手に分けて両儀とみなす)とある。この二句から、馮応榴と王文誥は、この詩が作られたのは蘇軾が四十九歳のとき(元豊七年、黄州に在り)とする。3〇正平一句 正平は、後漢の禰衡の字。文挙は、孔融の字。才気にあふれ傲慢であった禰衡だが、孔融と楊脩にだけは敬意を示した。『後漢書』禰衡伝に、「禰衡、字は正平、平原の般(山東省)の人なり。……唯だ魯国の孔融及び弘農の楊脩に善し。……融も亦た深く其の才を愛す。衡 始めて弱冠、而して融は年四十なりしも、遂に与に交友を為す」とある。4〇中散一句 中散は、三国魏の嵇康のこと。中散大夫を拝した。孝尼は、嵇康に琴曲の教えを乞うた袁準の字。『晉書』嵇康伝に、「康 将に東市に刑せられんと

し、太学生三千人 以て師と為さんことを請うも、許されず。康 日影を顧視し、琴を求めて之を弾じて曰く、「袁孝尼 嘗に吾れ自り広陵散(琴曲の名)を学ばんとするも、吾れ毎に斬しみて之を固り、広陵散 今に絶えんとす」ととある。5〇売劍一句 前の詩(作品番号〇九四三)の10句の注を参照。この詩でも前の詩と同じく、蘇軾自らが帰農したいという願いを詠ずる。6〇得錢一句 杜甫「醉時の歌」(『杜詩詳注』卷三)に、「錢を得れば即ち相覓む、酒を沽いて復た疑わず」とある。7〇鷄豚一句 韓愈「南溪に始めて浮かぶ 三首」その二(『韓昌黎集』卷七)に、「願わくは同社の人と為つて、鷄豚もて春秋に燕せんことを」とある。同社は、同じ土地神を祭る村人のこと。 遂瑗は五十歳になって、それまでの四十九年が間違いだったと気づいたが、私もかくありたい。歲月は占いのめぐはぎのように、四十九本の莖を数えたところだ。禰衡が孔融のみを師としたように、君が私の弟子となるなら、嵇康は袁准に琴を伝授しなかつたけれども、私は君に教える授けることに吝かではない。

劍を売って牛を買い、農夫として生涯を終えることを心より望む。お金を得れば酒を買うことに、全くためらいはない。将来（のお祭りに）、鶏や豚のごちそうを囲んで氏子仲間となれば、いくらでも唱和の詩を作ることができらう。

○九四六（施一六一—三二）

書泗州孫景山西軒

泗州の孫景山が西軒に書す

- 1 落日明孤塔 落日 孤塔に明らかに
- 2 青山繞病身 青山 病身を繞る
- 3 知君向西望 知んぬ 君が西に向かいて望み
- 4 不愧塔中人 塔中の人に愧じざるを

元豊二年（一〇七九）、四十四歳の作。前任地の徐州（江蘇省）から、転任先の湖州（浙江省）に向かう途上、泗州（江蘇省）での作。

○孫景山 孫奕のこと。景山はその字。閩県（福建省）の

人。「孫職方が「蒼梧山」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊四一〇頁）を参照。

1〇孤塔 僧伽の塔のこと。僧伽（六二八—七一〇）は、唐代に西域から渡来した僧侶で、しばしば神異をあらわした。渡来した初めは楚州（江蘇省）の龍興寺に在ったが、泗州臨淮県の信義坊で伽藍を建立すべく地面を掘ると、そこは北斉の香積寺の古地で、普照王仏の銘のある金の像が出土した。中宗のとき、僧伽は長安の内道場に招かれて国師とされ、泗州の寺は普光王寺の名を賜った。後に長安の薦福寺で遷化した際は、薦福寺で供養されると異事が起こり、僧伽が臨淮に帰るを欲しているとの近臣の言により、中宗は普光王寺に塔を建立して再度供養した（『太平広記』卷九六「僧伽大師」、『宋高僧伝』卷一八）。34〇知君・不愧二句 向西望は、西方を望む。西軒は、西を向いて建てられていたと思われる。塔中人は、僧伽のこと。二句について一韓智翊は、「此ノ西軒ヨリ見レバ、落日モ僧伽ノ塔ヲ照（ラ）シテ明ラカナゾ。此（ノ）塔ハ必ズ西軒ノ西ニ在ルベキゾ」（『四河入海』卷二四の一）と記す。

夕日の光がぼつんとそびえる塔を明々と照らし、病んだ
身体を青山が取り囲んでいる。そこで西方を望む君とい
う人、塔の中に眠る僧伽そうぎやに愧はにかむことはないだろう。

〔付記〕本稿は、西岡が原案を作成し、山本の校閲を経た
上で、南山読蘇会のメンバーである蔡毅（南山大学名誉教
授）、中裕史（南山大学外国語学部教授）、中純子（天理大
学国際学部教授）、原田直枝（南山大学総合政策学部教授）
の諸氏と共に検討を加えたものである。